

「手」をとおして、

からだのなかに残る記憶

渡辺 満美

手あて

「おなかがいいたい」

「どこがいいたい？ ここは？ ここは？」

おなかを触りながら子どもをのせる。そのまま子ども
て、ひざの上に子どもをのせる。そのまま子ども
のからだを話をするように手をあて、手から伝

わってくる子どもの気持ちとむきあう。子どもの
顔を見ずに手をあてることもある。本当に痛い
き、痛いところを触るとからだは自然と動く。顔
をみて判断するのではなくからだの動きから感じ
ることからはじめる。何も話していないが、ひざ
の上に乗っている子どものからだの身のおきかた
で今の気持ちも伝わってくる。そして、顔を見な

「がおなかに手をあてて子どもの動き・表情を感じとり、ことばをひきだしながら聞いてみる。幼稚園の養護教諭となり、子どもの、動き・身のおき方・痛さの度合いをからだで感じとろうとすることに集中する自分がいるのを感じる。自分の状況を伝えられない子どもたちに、どんな処置をしていくかは子どもの動きから判断するしかなかった。

保育中、保健室にくる子どもの中には本当に（器質的に）おなかの痛い子どもは少ない。ただ、本当に痛いとはどういうことなのか…。「どこがいたいのか」と手をあてて聞いていると膝の上に乗っている子どもの身のおき方から器質的なものからくるのではないが、痛さを感じている子どもを私は感じる。「本当に痛いの。〃だいじょうぶ〃なんて簡単に言わないで…」という声がからだから聞こえてくる気がしてしまう。そんな

時、そのまま子どものからだに向き合うことを続ける。そして、手をあてたまま、痛い理由を聞いたり聞かなかつたりと、からだから伝わってくる子どもの気持ちにあわせて私の対応は変わる。そのうち、硬くなっている子どものからだは、膝の上でふとした瞬間やわらかくなっていくのを感じ、もう言葉をかけても大丈夫かもしれないと感じる瞬間がある。手をあてている時間は、一分のときもあれば十分のときもあり、その場では足りないことも。この時間は、相手の必要とするものと私が感じることできたものが重なるために必要な時間なのかもしれない……。

手あてということばは、「相手を思いやる温かい心のこもったへ手」を患部にあて、その手の温もりで苦痛を和らげる」ということから発したことばと言われる……。

私はその手あての「手」を幼いときに感じたこととがある。その手を感じることができたから、手あてでは相手に気持ちや伝えることもできる「手」をもっていることを忘れず関わっていかなければいけないと思うのです。

記憶

「手」といえば、父親・祖父の大きくて、ごっこつした、仕事のなかで使ってきた手を思いだすとあるひとはいった。その手とともにある記憶に私は思いをめぐらせた。私にとっての「手」は……。

幼いころ二度の入院をした。二度とも一か月ぐらいの入院。しかし、私はお世話になった病院の方たちの顔をまったく思い出せない。ただ、処置をしているときの手の動き、私の手を握ってくれたときのその人の手の温かさ、からだを支えてく

れた手によって安心していく感じ。手の動きと温かさだけが取り出されたように私のからだで感じた感覚として記憶に残っている。

手術直後、はつきりした記憶ではないが不安で母の手を探り、ずっと握ってもらっていたことを憶えている。握られた手を離されたとき、周りの人たちがいなくなるだけでなく自分自身の存在もなくなってしまうようでこわかった。そして、私は母の手を夢中で探した記憶がからだの感覚として残った。母は

私の手をつよい力で握っていたわけでもなく、不安に引き戻されてしまいそうなよわい握り方でもなく握って



くれていた。しかし、手を握っていてもらうことで、不安でいっぱい私のからだに手の温かさがしみわたっていくような気がしたのを憶えている。『不安』だった記憶とともに手から伝わる『手の温かさ』が今でも私のからだの感覚に残っている。私のなかで『不安』と『手の温かさ』は一緒の記憶になっていた。

不思議なことは、この記憶が昔からの記憶ではないこと。ここ数年の間で思い出されてきた記憶。幼いときの体験としてからだの中に残っている感覚の記憶がふとした瞬間に、同じような場面を体験した瞬間などに、思いだされ、その記憶とともにそのときの感情がだんだんと思い出されていくのを感じている。私は早く家に戻りたいという思いだけで病院での生活を過ごしていた。私の手を握ってくれた母の思い、担当だった方たちの私にかけてくれた思いを感じることはなかった。

しかし、入院中の生活を振り返ると、不安を感じたことも嫌だったこともあったはずなのに「入院中の生活」と「不安」が今の私は結びつかない。それは、私を支えてくれた人たちの思いがあったからだと思う。きっとその『温かい手』をさし続けてくれた人たちの存在がなければ、今の私には嫌な記憶と不安だけが残っていたのかもしれない。私にとっての「手」は、とても温かく不安を取り除いてくれる存在で、手を通してそれぞれの思いを伝え合うことのできるものであった。私にはこの記憶があるから、伝えることのできる思いも必ずあるものだと思われられる。そして「手あて」を行うときの私は、この「手」の記憶をぬきには存在してはいないと思う。

「温かい手」を持った人たちの手は本当に温かったのか…？

実際の母の手は、今も昔もつめたい。私が手を温かいと感じていたのは、そこに私への思いがあったからだろう。体温とは関係なく気持ちの温かさがあったのだろう。私は体温の温かさでなく、『気持ちの温かさをもっている手』と出会えたから、手が不安を取り除いてくれるものだと思うのかもしれない。からだで感じたことは気持ちとも結びついていくのだろう。そして気持ちをからだで感じることもできるのだろう。からだで感じた記憶はずっと残っている。その記憶がはつきりとしたものとなっていくのは、自分の気持ちをとばで表現することができるようになったときかもしれない。

S子の「手」

おかえりの時間。S子が「せんせい行かないで、一緒にいて」と私の手を取り、必死な顔で訴

えた。「ギユウ」と握られた手から行かないでという必死な思いが伝わってきた。幼稚園で生活はじめて約二か月。ここ二、三日保健室に顔を出していたS子の訴えだった。おかえりの時間、保健室だけがの手当てを待っている子どもがいるかもしれないと思いながらもその子と一緒にいることを決めた。そして、ならんだ椅子の端のところに行き、私と手をつないだままでも彼女が座れるように「ここでいいかしら？」と聞くと「うん」とこたえた。S子は私の手をつかむ力を緩めなかった。私はS子の座る左側に腰をおとした。少しだけ時間がたつたとき、私はS子に「ちょっとだけ、待っていてくれる」と聞くと、不安そうな顔を見せながらも「すぐね」と言って手を離れた。

私は保健室に帰ることを一度はあきらめながらもやはり気になり、S子に少し付き合ったところ

でS子はもう大丈夫だろうと思ったのだ。しかし手を離れた瞬間、S子の手の離し方からその判断が間違っていたことに気づかされた。私はその場にS子とただだけ（付き合っただけ）だったのだ。S子がその場で不安を抱いたまま過ごすことのないようにということは考えていなかったのだ。手を離れたときのS子の気持ちを感じ、すぐにS子の所へ戻ろうと思いつつも保健室へ向かってしまった。

もしかしたら、S子は待っていないかもしれない……。

S子のいる部屋に戻りS子の方を見ると、H先生が、後から入ってきたF子のためにS子の左側に椅子を並べていた。その光景を見て、一瞬、そばに行くことを迷ったがS子は待っていた。まだ、S子と関われることに半分ホッとして、まだ遅くないと思えた。S子は必死な顔で手を伸ばし



てきた。その手を取り、私はF子の横で腰をおろし、F子の膝のあたりでS子と手をつないでいた。Y先生がみんなの前で本を読み始めた。手をつなぎながら、さつきは感じることでできなかったS子の落ち着く感じを手から感じることでできた。本も楽しくなってきた頃、隣のF子に「S子の手を握ってあげてくれる？」と小声でいうとF子は何も聞かず、そっと手を出しS子の手を握った。最初こそS子は私のほうを見たものの、それからまた本の世界へと入っていった。私は、本が終わるまでその場にいた。F子は本を読んでいる間S子の手をずっと握っていてくれていた。私は

その場を離れた。

おかえりにならんでいるS子と廊下でまた出会った。手を振っていた。しかし、すぐに手を握ってくることはなかった。少し一緒に歩いたあと、手を握ってきた。まだ不安だったのだろうか……と思った。しかし、S子の手は私の手をやさしく握んでいた。S子の後ろにF子がならんでいた。

「F子と手をつないで帰ろうか？」と言うとS子はF子の手をそっととって手をつなく。そして、つなげたふたりの手がリズムをとるように振られはじめた。その振動で私とつながれている手も小さく動いた。二人は顔を見合わせていた。三人で手をつないでいるはずなのに、そこに私はいなかったように感じた。二人の世界が出来ていたように思う。そっと私は手を離しS子と離れた。S子が私を振り返ることはなかった。

S子にとって私の手は不安をとりのぞく「手」となれただろうか……。

この小さな出会いは二人をつなぐきっかけとなり、どこかで二人が出会ったときに温かい気持ちを思い出してくれるものであればと思う。また、この瞬間だけだとしてもS子にとって友だちを感じることであった関わりであれば、それだけでS子には大きな関わりだったと思う。

私の手ではなく、「F子の手」が不安をとりのぞく手となっていてくれたら、これからのS子の生活はより安定したものになっていくのではないだろうか。私はS子の生活がより安定したものになっていく「手」としての関わりをしていきたいと思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)